

認知症の経過中に解離性同一性障害を示した1例

Case Study of Dementia presenting Dissociative Identity Disorder

大東 祥孝^{1,2)}, 藤 若菜³⁾, 原山恵梨子³⁾, 田浦 一樹³⁾

要旨：アルツハイマー型認知症発症後、解離性同一性障害を示した症例を報告した。その発現機序として、二重に構造化された意識—記憶複合体を想定し、進化論的に後期に発生した高次複合体が早期に発生した一次複合体を制御しきれなくなる事態を想定した。そうしたことの生じる大きな要因として、高次複合体の果たす「ファサード」が弱体化し、一次複合体から生起する進化論的に低次な人格（意識—記憶複合体）が前景にでるのではないか、という仮説を提起した。

Key Words：解離性同一性障害，認知症，記憶・意識複合体

はじめに

「解離」(dissociation)と称されている精神病態がある(野間, 2007)。この概念の源泉は、ジャンネの「心理学的自動症」L'automatisme psychologique (Janet, 1889)において記載された「統合不全」“désagrégation”にさかのぼる臨床症候である。何の統合不全かという、記憶、知覚、運動、などあらゆる心理領域に及ぶのであるが、これは結局、そもそもが「統合活動」であるところの「意識」(ジャンネ)の統合不全と考えてよい。

しかし、このように捉えられる「統合不全」が実際にはどのような臨床像をとるのかについては、現在でも必ずしも臨床的一致をみているとはいえない。

ジャンネのころには、当時大きな議論となっていた「ヒステリー」を主な対象としていた。ジャンネはまた、同一人物にみられる人格交代を記載し、これを「心理的解離(désagrégation psychologique)」とみなした。これが英語圏に導入されて、人格の解離(The dissociation of a personality)として記載され、ここに至って、解離(dissociation)が登場する(Putnum, 1989, 1997)。現在では、解離性健忘(Dissociative Amnesia)が、今ひとつ大きな

解離性臨床症状としてとりあげられている。このように、解離の様態は実に多様であり、中核をどこに据えるかによって大きく異なってくる。これはしかし、解離を「意識の統合不全」とみなす立場からすれば、むしろ当然の帰結ともいえる。

今回我々は、認知症の発症後まもなくして「解離性同一性障害」(交代性人格)を示した事例を経験した。こうした症例は自験例としても、文献報告例としても、調べ得た限り見出すことができなかった。そこで、どのような機序でこのような事例が生じることになったのかを考察した。

1. 症 例

73歳右利き女性。

既往歴：特記すべき疾患には気づかれていない。
病歴：27歳で結婚、長女、長男の二子をもうけたが、夫が「酒乱」で激しい暴力がたえず、数年で離婚。和文タイプができたので、子供を育て生計をたてていたという(娘の話)。独居のため明確ではないが、70歳頃から物忘れがはじまり、72歳頃から徘徊で病状に気づかれはじめ、介護

【受理日 2014年6月25日】

1) 周行会 湖南病院 精神科 Yoshitaka Ohigashi : Department of Psychiatry, Konan Hospital

2) 京都大学名誉教授 Yoshitaka Ohigashi : Professor Emeritus of Kyoto University

3) 湖南病院 重症認知症デイケア Wakana Fuji, Eriko Harayama, Kazuki Taura : Day Care Center Dementia Konan Hospital

高齢者住宅へ入居。「何がなんだか分からない」と言うことが多くなり、夜間、下半身裸で徘徊することが目立つようになってきた。翌年頃から、他人の居室に入ったりして持ち出したのか、自室から男性のスーツや衣類が見つかるようになった。訊くと「俺のもんだ」と言いはり、興奮状態になる。まもなく身の回りに男物の品物（ネクタイ、スーツ、カミソリなど）を集めることが目立つようになり「これは俺のや」と言う。同時期から同居者の腕をつかんで振り回したりし、「こわいおっさんがくるから、こっちへ来ときなさい」と言ったり、手を出した相手に謝りにいって、また掴みかかったり、を繰り返していた。対応に困った職員は、患者をAクリニックへ連れていった。最初は穏やかに診察に応じていたが、急に「俺はなあ」と男言葉で話し始め暴言をはくようになったため、対応について著者に電話相談があり、解離性障害の可能性も疑われること、とりあえず鎮静をかねてオランザピン5mgを投与してB病院を受診してもらうようにと伝えた。それから1週間後、娘とともにB病院を受診。一見穏やかで、礼節も比較的よく保たれている印象を与え、人格交代や興奮はみられなくなっていた。娘によると、オランザピン服用後、帰宅して食事をして寝たが、翌日以降「男」になったり興奮状態になることは、ほぼなくなっているという。よくきくと、数か月前から、5、6歳の子供のような話し方をするようになり、「これ、きれいやね、パチパチ、きれい、上手、上手」と言ったりするようにもなったという。「男」の人になると、うつむいて目をあわさず、車椅子の人に、「のけ!」と言ったり突きとばしたりしていたという。元々の人柄は社交的で活発だったらしい。以後、1週間に3回、B病院の重度認知症デイケアに通所するようになった。デイケアでは概ね落ち着いていたが、時に男言葉になり、「俺はなあ、馬鹿のパパバのばあちゃんに嫌われるから、早く帰って知らんぷりしたいんだ」、「俺は結婚するんだ、お嫁さんのおっかさんはよいひとだ、俺は何も自分のことできないんだ」などと語る。約1年後の最近も時に出没しているが、攻撃性は当初ほど強くない。

2. 初診時所見の概括

すこし俯き加減ではあるが、歩行に問題なく、筋強剛、振戦も認められない。とりあえず礼節はよく保たれているように見え、対応は落ち着いてはいるが、なかなか椅子にすわれず、強い見当識の障害、健忘症状があり、言語面では、検査場で相当の解体がみられ、図形の模写はほとんど不可能で、強いclosing-inを認めるのみである。視線の動きは乏しく、視覚性注意の障害が目立つ。

診察中に「男」口調に変身したり、態度が変わったり、ということは認めなかった。男のようになり、乱暴したり、子供のようになりしたることについてきくと、きょとんとして「そんなことありません」と言う。MMSEを試みたが「わかりません」と繰り返えすか、ジャルゴン様の発話になって何を言っているかわからず、結局、施行困難であった。

3. 診察時の対話の一部

調子は？ 「ふつうです。」

お名前は？ 「さんまんえんが……………（三万円？） 姓を告げると名前は正答。

おとしは？ 「このこのここ、いまはしません（このこと？） どこかへいったかどっちのことかあんまり……………」

おいくつになられます？ 「にじゅうご」（25）

右隣にすわっている娘をさして、この方は？ と問うと、なかなか右側の娘の方を見られず、右斜め前を当惑して見つめている。

娘が、私だれ？ と自分の方を振り向かせると、「このの、このの、この、このの、*（本人の名前）の母です、おかあさん」

娘さんじゃない？ 「いますけど、こののばあさんのおかあさんが、あんたなんだ。」

4. 5物品の指示, 命名, 復唱

鋏, のり, 鉛筆, 鍵, ペットボトル (水) を、横に並べて口頭で選択を指示。鋏→鉛筆, 鍵→鉛筆, ペットボトル→のり, 鉛筆→のり, のり→鋏, と指す。指示は0/5で、検査場面での単語理解は極めて不良である。

同物品の命名と復唱

鋏→「いやー、これかな、あれ、何? そういうていいの? そういうことだったの?」

財布→「なんというもんやろ…名前がでてこない。(何するもの?) かぜのむこうがわの、何かわかりませんわ、開けられない…」

鍵→「何だろ、誰かのお母さんのお母さんの…… (何するもの?) わかりません。」

このように、命名も0/5で極めて不良、ジャルゴンや反復言語を交え、意味記憶も解体しつつあるようにみえる。しかし単語レベルの復唱は即座に正答する、聴覚的理解を伴わない復唱が良好で、超皮質性感覚失語様であった。

5. 神経心理学的病像とCT・脳波所見

健忘症状群、見当識障害は極めて重篤。言語の解体が認められる。自発語にジャルゴン様発話が見られ、単語レベルでの理解や命名の障害は極めて強いが、自動的な復唱はむしろスムーズで、ジャルゴン様の反復言語も出現している。行為の解体も重篤である(物品使用操作障害、自己身体定位障害など)。“closing-in”を伴う重篤な構成障害があり、中等度のバリント症状群も認められる。ADAS-JCOGは57.7と極めて不良であった。図1と図2にCT画像と脳波所見を示す。

6. 考 察

本例は、病像、経過、検査所見などからみて、2期～3期へ移行期のアルツハイマー型認知症

(AD) と考えられる。しかし、ADとして特異なのは、経過の途中から、一見、解離性同一性障害と思われる病状を示したことである。繰り返すが、ADあるいはその他の認知症で、解離性同一性障害を示した、という症例の自験例および文献報告は、筆者の調べえた限りでは見出されなかった。

まず検討すべきは、認知症ではない事例でみられる解離性同一性障害との異同である。本例では、元来の人柄が急に変わって、こわもての男性のような言動を示したり、子供のような言動を呈したりしている。興味深いのは、ある時期以降、男物の品物(ネクタイ、スーツ、カミソリなど)を手許に集め始めていることである。ふつうの状態にある時にこわもての男性や集めた男物についてきいても、きょとんとして「知りません」という。むしろ、健忘症状が強いので、解離性の健忘が関与しているのか否かはわからない。しかし言動をみている限り、ふつうの時と男性の時の間には確実に区画化[compartmentalization (Holmsら, 2005)]が生じていると思わざるをえない。したがって、現象面のみからは、認知症を伴わない場合の解離性同一性障害と本例を区別することは困難である。

今ひとつ、これまで記載されてきた多くの解離性同一性障害で、しばしば若いころに心的外傷体験を有していることが知られているが、本例でも、結婚後、酒乱の夫から相当に激しい暴力をうけていたようで数年で離婚に至っている(娘による証言)。病歴を確認する限り、認知症の発症以前は穏やかで、人格交代のようなエピソードにはまったく気づかれていない。この点でも、認知症を伴わない解離性同一性障害との類似がみられるようである。

さて、明白なAD型認知症と考えられる本例で解離性同一性障害が生じたのは、どのような機序によるものなのであろうか。類同の症例が見あたらないので他の症例を参照することは難しい。そこで、仮説的に、認知症において解離性同一性障害が生じるにはどのような要件が必要なのかを考えてみることにした。

発表者は2005年頃から、「意識は二重に構造化されている」と主張してきた(大東, 2002, 2005,

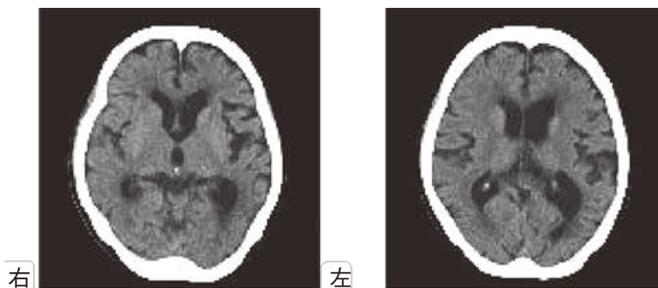


図1 頭部CT画像

以下の所見が認められた。

- (1) 左右側脳室下角の開大, (2) 左右側頭葉内側面の萎縮,
- (3) 左優位の側脳室の拡大, (4) 両側シルヴィウス溝の開大,
- (5) 左優位の後部脳溝の開大

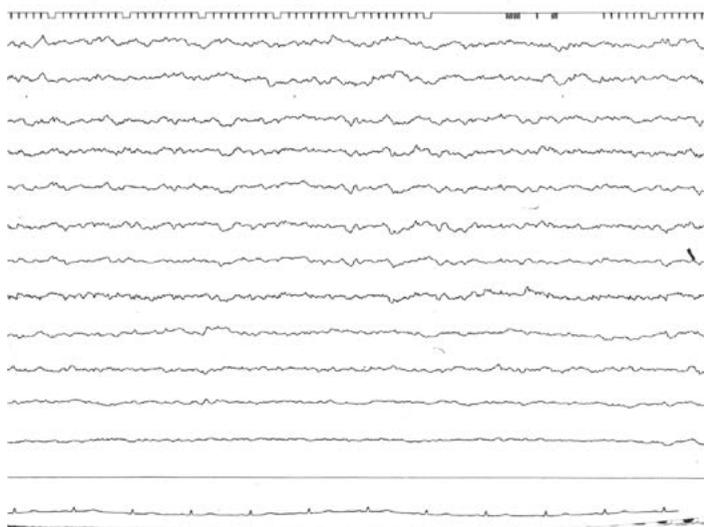


図2 脳波所見

低振幅除波 (6-7c/s) 優位で、アルファ波に乏しい。

2006, 2007, 2008, 2009, 2011)。これは、エーデルマン (Edelman, 2004) の意識論を援用しつつ、進化論的に、より早期に出現した「一次意識」(primary consciousness) = 想起された現在 (Remembered Present) と、言語を媒介として後に生じた「高次の意識」(higher order consciousness) とから、構造化されているということである。ジャネにしたがって解離を、「意識の統合障害」と考えるならば、そして意識は、「一次意識」と「高次の意識」とから構成されている

という立場からすれば、解離は、一次意識、高次の意識の解体と、どのような関係にあるのか、といった問いが生じる。

しかしまず、解離を考えるうえで重要な「意識と記憶」の関係についてふれておかなければならない (Tulving, 1985)。想起とともにエピソード記憶は記憶ではなくて、意識化されて、「意識」となる、つまり、記憶は、意識とは相容れないのである。意識化されて意識の俎上にのぼれば、それはもはや記憶ではないし、記憶であったものとも

限らない。しかし、意識化されないと記憶は、その存在自体が必ずしも明らかにはならない。したがって、意識と記憶とはいわば表裏の関係にあって、「意識—記憶」複合体を形成していると考えられる。

ここで、解離は、一次意識、高次の意識の解体とどのような関係にあるのか、といった問いが生じる。重要なのは、意識と記憶の関連である。想起されるとともに、記憶はもはや記憶ではなくなって、意識化されて、「意識」となる。要するに意識と記憶とは相容れないのである。そこで一次意識をPC (Primary Consciousness)、一次意識と表裏の関係にある記憶をPM (Primary Memory) とし、高次の意識をHOC (Higher Order Consciousness)、高次の意識と表裏の関係にある記憶をHOM (High Order Memory) とすると、ふつうの状態では、「PC—PM」と「HOC—HOM」という複合体が一体になって、統合的に「意識」されていることになる。ここでいう「意識—記憶」複合体というのは、ほとんど「人格」といってもよいものと思われる。この「人格」を統御しているのは、ふつうは後者「HOC—HOM」と考えられるが、その統御が何らかの機序によって十分効かなくなると、前者「PC—PM」が前景にでてしまうことがありうるだろう。こうして、進化論的にはより古い意識が（ピアジェのいう意味で）自動症的に現れてきて、前者が、いわば退行した人格として意識を支配するに至る可能性がある。図示すれば次のようになろう（図3）。

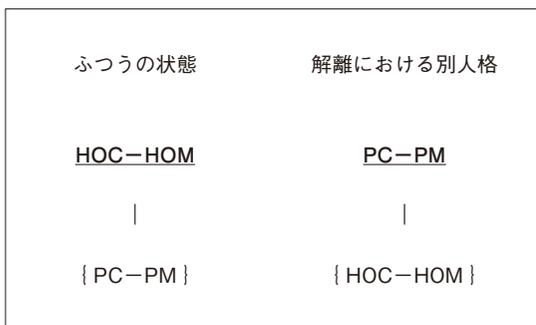


図3 一次意識と高次の意識の関係

我々が経験したような、認知症に伴って「解離性同一性障害」が生じた症例の存在は、認知機能の障害と意識の統合障害とが、独立に生じうる、ということを示しているのかもしれない。そして、統合障害〔人格交代〕が生じうるためには、少なくとも二つの意識—記憶複合体が、それぞれ概ね独立に現象しうる程度には、残存していなくてはならないはずである。たとえ残された「高次の意識」が、いわば相当に形骸的していたとしても、である。

我々の症例において、認知症が相当に進行しているにもかかわらず、ごく稀な事例として、一見、解離性同一性障害の病像を呈するに至った理由として想定されることのひとつは、本例における高次の意識にあって、認知機能は極めて強く障害されていたにもかかわらず、人格の外面的ファサード〔表面的外見（表向き）〕が例外的によく保たれていたことが一因かもしれない。一般的には、認知症の進行に伴って、多くは強い認知障害を反映して、高次の意識の「ファサード」も崩壊してゆくことが多いと思われるが、もし仮に、高次の意識のファサードのみが強く残存していたとすれば、一次意識における人格との間で相克が生じる可能性がある。そして、高次の意識のファサードの制御がどうにか効いている間は、とりあえず言動に明確な変化は生じないが、高次の意識におけるファサードが（認知症の発症に伴って）徐々に弱体化していった場合、特異な退行的人格が一次意識において生成してきて、それなりに人格的な言動を示しうようになってくる可能性が想定される。いわば高次の意識の制御を超えて、一次意識における「人格」が自動症的に現前化してくることになるのである。

あくまで仮説的水準ではあるが、それが、本例において生じた解離性同一性障害の主要因なのではないか、と我々は考えている。

文 献

- 1) Edelman, G.M. : Wider than the sky—the phenomenal gift of consciousness. Yale University Press, New Haven and London, 2004（冬樹純子、訳、豊嶋良一、監修：脳は空より広い。草思社、

- 東京, 2006) .
- 2) Holmes, E.A., Brown, R.J., Mansell, W., et al. : Are there two qualitative distinct forms of dissociation? A review and some clinical implications. *Clinical Psychology Review*, 25 : 1-23, 2005.
 - 3) Janet, P. : *L'automatisme Psychologique*. Felix Alcan, Paris, 1889.
 - 4) 野間俊一 : 解離性障害の概念. *精神科*, 10 : 255-260, 2007.
 - 5) 大東祥孝 : 精神・脳・神経心理—知るとはどのようなことか. *ブレインサイエンスシリーズ 24 「脳とこころ—神経心理学的視点から」* (田邊敬貴, 責任編集, 岩田 誠, 大東祥孝, 加藤元一郎, ほか) . 共立出版, 東京, 2002.
 - 6) 大東祥孝 : 神経心理学からみた精神医学のすすむべき方向. *臨床精神医学*, 34 : 323-330, 2005.
 - 7) 大東祥孝 : 神経心理学の新たな展開—精神医学の「脱構築」にむけて—. *精神神経学雑誌*, 108 : 1009-1028, 2006.
 - 8) 大東祥孝 : 離人症と解離. *精神科治療学*, 22 : 297-304, 2007.
 - 9) 大東祥孝 : 記憶と意識—全生活史健忘. *こころの科学*, 138 : 64-70, 2008.
 - 10) 大東祥孝 : 解離とニューラルシステム. *精神科リユミエール 20 「解離性障害」* (岡野憲一郎, 責任編集) . 中山書店, 東京, 2009.
 - 11) 大東祥孝 : 精神医学再考—神経心理学の立場から. 医学書院, 東京, 2011.
 - 12) Putnum, P.W. : *Diagnosis and Treatment of Multiple Personality Disorder*. Guilford Press, New York, 1989.
 - 13) Putnum, F.W. : *Dissociation in Children and Adolescents. A developmental perspective*. The Guilford Press, New York, London, 1997 (中井久夫, 訳 : 解離. みすず書房, 東京, 2001) .
 - 14) Tulving, E. : How many memory systems are there? *Am Psychol*, 40 : 385-398, 1985.